



中高生とともに差別と闘う

ストーリーに終わりなし

吉成タダシ



ストーリーに終わりなし

この劇は、一年、二年、三年と毎年、文化祭で続編が上演されていきました。そのうち、「SEASONS」シリーズを文化祭で上演するのは当たり前というまでになりました。が、続編が上演されるのには、私なりの理由がありました。

実は学校で扱う人権学習の教材は、部落問題に限らずどんな人権課題も、その資料で完結するようなストーリーがほとんどです。でも、現実とは違います。現実世界では、ストーリーに終わりはありません。当たり前前のことです。

例えば部落問題の学習で、「結婚差別を乗り越えた」ということがあります。そうすることで、部落差別の全てを克服したかのような捉えになってしまうことがあります。「はいおしまい！チャンチャン！」といった具合です。もちろん、そういった例もあるでしょう。でも、私が出合ってきたケースの多くには、「その後」があるのです。結婚したあとも、苦悩や葛藤が、当たり前のようにあったのです。そのことを考えずして、「結婚できたから万々歳！」というのは、あまりにも短絡的だと思うのです。私は、「その後」を描きたかったし、みんなに考えてほしかった。じゃないと、「結婚差別を乗り越えたから、もういいじゃないか。部落問題とはおさらば」といった決着のつけ方を学校が教えてしまうことになりかねない

し、ヒトゴトで終わらせることを許してしまおうように思えるのです。それはやはり、無責任だと思うのです。だからこの劇は、「出会い、別れ、再会、闘い、結婚」から、「子育て、成長、苦悩、告白、闘い」と、一応の区切りまでに、五年の歳月を費やすことになったわけです。

その、「SEASONS」を私小説風に書き直したものを資料として、毎週の道徳の時間を使い、生徒が役になりきって読み合いをしていきました。学校教材にはない現実感を、感情移入しながら読み合うことで、遠くのことや身近な、自分のことのように感じられるようになってきたある日のこと。かつての教え子アツミから、メールが届いたのです。

アツミのストーリー

アツミは、vol.1235からvol.1237の、このコラムで紹介させていただいたアツミです。彼女のメールを読んで、ストーリーに終わりが無いことを、私はあらためて痛感することになったのです。

「久しぶりです！ 私、今パソコン教室に行ってるんです。四人だけのクラスなんですけど、私も含め三人が女で、一人は28歳のAちゃん。もう一人は36歳のBさん。この二人いつも、休憩室でたわいもない話をしてるんです。本当は五人クラスだったんだけど、36歳のC町の男の人がやめたんです。それで今日、休

憩室でその男の人の話になったんです。」

久しぶりの連絡でした。でもその内容は、昔を懐かしむようなものではなく、いきなり「今」の生活を語るものであり、私に、「何かあったのか」と思わせる始まりでした。

「なんでやめたの？っていうか、C町のどこの人？」ってBさんに訊かれたから、「D（字名）って言うってたよ」って私が言ったんです。すると、「あ、じゃあ絶対学費払わないわ」って、ケラケラ笑うんです。「何の関係があるの？」って訊くと、「Dっていえば、この辺でも二番目くらいに悪いところ」って。「何が悪いの？」って訊くと、「地区（被差別部落の人間が密集してるからよ。あなたC町なのに知らないの?!）って言われたんです。だから、『うわ、まだそんな考え方の人、ホントにいるんだ。あり得ない』って言ったんです。」

C町にはD以外にも地区があり、アツミはその地区の出身です。たとえD出身でなくても、共に学生時代を過ごしてきた大切な仲間が、Dにはたくさんいます。共に部落問題について学び合い、考え合い、人生の本当に大切な瞬間を分かち合ってきた仲間がDにはいるのです。そこを悪く言われるということは、アツミにとって自分が悪く言われるのと同じことです。Dじゃないからといって、自分だけ逃げるわけにはいきません。だから、何とか抵抗した

かったのです。

最後の言葉は、「もうこれ以上言うのはやめて！」という、アツミなりの訴えであり、心の叫びだったのだと思います。ですが、悔しいことに、地区への差別意識は具体的な言葉となつて、次から次へと渦を巻いて濁流のように流れ込んでくるのです。

偏見に満ちた嘘のうわさ話

「するとAちゃんが、『あなた何言ってるの??地区はホンマにヤバイんよ!!Dって地区なんよ。だから面倒な人が多いの。あの辺りは普通に車で走ってるだけで人が飛び出してくるから気をつけた方がいいよ』って。『私も通つたりするけど、そんなことないよ。だいたいそんなことされたら警察に言えはいいいじゃない』って言った。そしたら、『警察になんか言っても一緒よ!!警察呼びますって脅しても、呼べ呼べって言うだけ。警察だつてその場をおさめて帰るだけ』って。私、茫然としてしまいました。これだけ言われたの初めてで、『私が部落出身って言うたら、この二人どんな顔するんだろ、これからどんな態度とられるんだろ』と、モヤモヤしてしまいました。」

私自身、同じような嘘のうわさ話は何度も聞いたことがあります。それはまことしやかに、まるで自分が体験したかのように言われます。ですが……

(次回「いるのにいない存在」)